

# 宇和奈辺陵墓参考地採集の埴輪について

土生田純之・清喜裕二・加藤一郎

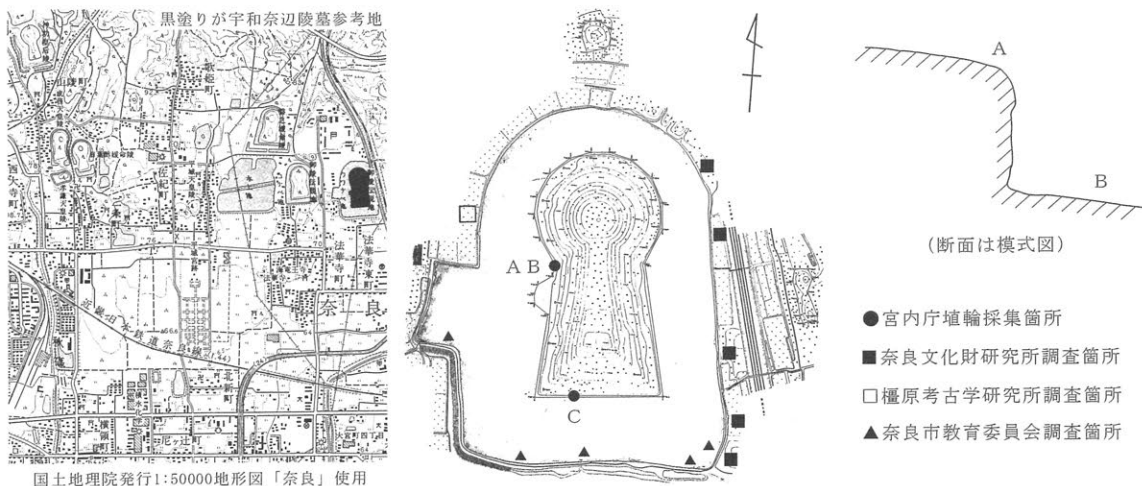
## はじめに

奈良盆地の北端部には、現存7基の大型前方後円墳を中心とした佐紀盾列古墳群が所在している。このうち、大型古墳としては最も東端に位置するのが宇和奈辺陵墓参考地である。本参考地は満々と水をたたえた周濠とともに、均整のとれた墳丘が見事な調和を見せており、最も美しい古墳であるともいわれてきた。しかし、用水池として利用されてきたために本来の水位よりも相当高くなっており、年々墳丘裾部を侵食する結果ともなっている。激しいところでは高さ3m以上の崖状を呈するまでになっていた。

そこで昭和61年3月18日に土生田を現地に派遣し、現状の確認と墳丘裾部の略測を行った。その際、前方部西側裾部の崖(第1図A・8点)上で、樹根等に絡んでかろうじて落下をまぬかれている一群の埴輪を発見したが、そのまま放置すれば水中に落下することが確実であった。また造り出しの北側(第1図B・39点)や前方部前端西寄りの墳丘裾(第1図C・1点、B・C地点とも当日は墳丘裾と水際との間が若干の犬走り状になっていた)にも埴輪片が落ちていたため、これらを併せて採集した(総数48点)。

本参考地の周濠は、平安時代以降用水池として利用するため次第に外堤を嵩上げて本来より1~1.5m程度高くなっている。このため満水時には造り出しが冠水することもあり、既にその上面は損壊したものである。奈良文化財研究所の調査においても、造り出し付近で須恵器、土師器片や土製品が採集されており、造り出しで実施された祭祀・儀礼に伴うものであろう。B地点では他より多くの埴輪片が採集されており、墳丘上からの落下のほか、本来造り出しに配置されたものが多く含まれているものと思われる。ただし、基本的な特徴はA地点のものとは何ら異なるない。

ところで、書陵部には第2次大戦前から宇和奈辺陵墓参考地と注記された21片の埴輪がある。これらは普通円筒のほかには鱗付や形象埴輪を含む。採集年次や位置の記録がなく、正確には不明といわざるをえない。しかし一部の埴輪片には「宇和那邊傳説地西端」と墨書されている。傳説地という名称は明治18年から大正15年までの期間に使用されたもので、少なくとも傳説地という墨書銘のある資料についての採集時期はこの間に措定出来よう。また「西端」については、本参考地は墳丘のみの指定で周濠は民有地であることから、



第1図 宇和奈辺陵墓参考地 位置図(1/100000)および埴輪採集箇所位置図(1/8000)

西側面の墳丘裾を示すものと考えてよい。その際、形象埴輪を含むことから、造り出し周辺であった可能性が考えられる。これらの埴輪についても、今回報告する資料との基本的な差異は認められない。

以下に報告する資料は昭和61年の採集品に限るが、戦前の採集にかかる書陵部所蔵資料をはじめ、奈良文化財研究所が調査を実施した墳丘外堤部出土の埴輪についても実見して比較検討を行った<sup>(1)</sup>。

(土生田純之)

## 採集遺物(第2～7図)

採集資料の破片総数は48点であるが、接合したものも多く、今回報告するのは16点である。そのうち、15、16は朝顔形埴輪となることが確実であるものの、他のものについては円筒埴輪であるか朝顔形埴輪であるか判別不能であり、ここでは円筒埴輪として扱うこととする。なお、鱗の有無については、2段目あるいは3段目から取り付く可能性もあるため、現状では鱗が確認できない個体であっても鱗を有していた可能性が考えられることに留意されたい。

焼成は、いずれの資料にも黒斑がみられないことから、窖窯によるものと判断される。焼成の仕上がりは、埋蔵状況に左右される可能性もあるが、軟質のもの(11など)から非常に硬質なもの(5、6、15など)まで差異が大きい。なお、赤色顔料の塗布は基本的に焼成後におこなっているが、5、6については焼成前におこなっているようである。

胎土は、どの資料も大きな差異がなく、密であり、径5mm以内のチャートや径1mm程度の白色砂粒(花崗岩起源か)を少量含む。器面の調整方法に起因するものか断定はできないが、砂粒は器面にあまり目立たず、断面にみられる傾向にある。

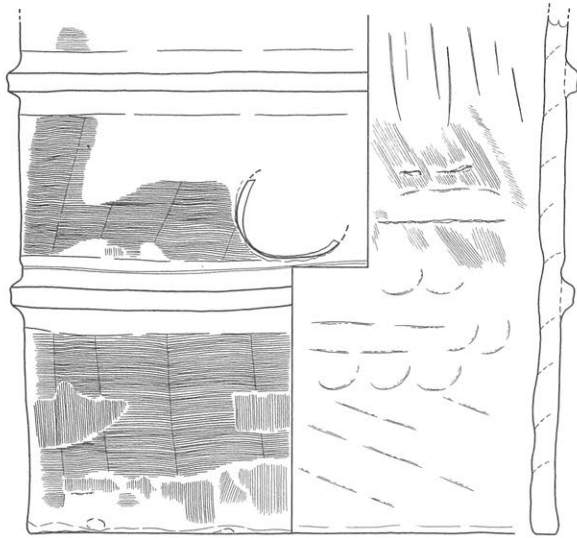
色調は黄白色のものが大半であるが、5、6はやや赤味がかった。焼成前に赤色顔料を塗布していることと関連があるのかもしれない。

なお、図示した各資料の採集位置(第1図参照)については、番号脇の括弧内に記した。

1は第1～3段の破片で、底径は約28cm、底部高は約13cm、突帯間隔は約11.5cmである。外面にはB種ヨコハケがほどこされるが、第1段のものはそれほど傾かないのに対して、第2段のものは斜めに傾いている(写真1)。また、現状で外面には赤色顔料が塗布されていないが、上段に塗布した際のしずくが付着している(写真2)。内面調整は第1段付近がナデ、第2段付近が左上方向のハケ、第3段付近が板ナデのようにもみえる不明工具によるものである(写真3)。なお、この資料は平成15年に当部が発行した『出土品展示目録 埴輪Ⅳ』に掲載された(58)の資料である。全形の写真については参照されたい。ただし、整理の結果、新たな接合関係が判明したため、外形が異なる点に留意されたい。2は焼成や色調などから判断して、1と同一個体と思われる破片である。小片ではあるものの、透孔が確認できる。その形状は方形であったと考えられ、1には円形の透孔のほかに方形のものもあったことが推測される。

3は第1～2段の破片で、底径は約31cm、第1段高は約14cmである。外面にはB種ヨコハケがほどこされ、その静止痕は斜めに傾いている(写真4)。第2段の外面には製作時についたと思われる痕跡が残っているが(写真5)、その成因は不明である。また、第2段には透孔が穿たれているが現状では円形なのか半円形なのかは判然としない。内面調整はナデであるが、下から4.5cm、15.5cmあたりで水平方向に周回する爪の跡とも思える痕跡がみられる(写真6)。なお、この資料は平成15年に当部が発行した『出土品展示目録 埴輪Ⅳ』に掲載された(57)の資料である。全形の写真については参照されたい。4は突帯形状やヨコハケなどから3と同一個体と思われる破片である。半円形の透孔が穿たれており、これにより3の透孔はおそらく半円形であり、4はその対となる透孔周辺の破片になると思われる。

5は第1～2段の破片で、第1条突帯付近から鱗が取り付いている。底径は約30cm、第1段高は約13cmである。外面にはヨコハケがほどこされているが、複数回なされていて切り合いがあり、静止箇所はあるものの静止痕が判然としない箇所が多い(写真8)。また、第2段の外面には赤色顔料のしずくが落ちている。内面にはハケを念入りにほどこしている(写真9)。鱗の接合に際しては棒状の工具により器面に縦方向の沈線



1 (A)



写真1 1の外面(第1~2段)



写真2 1の赤色顔料付着状況

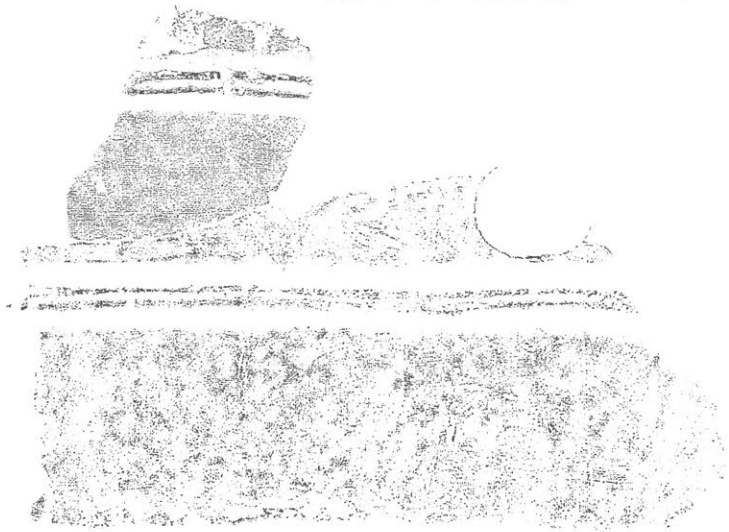
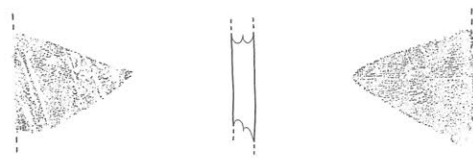
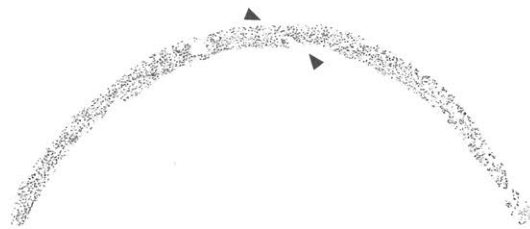


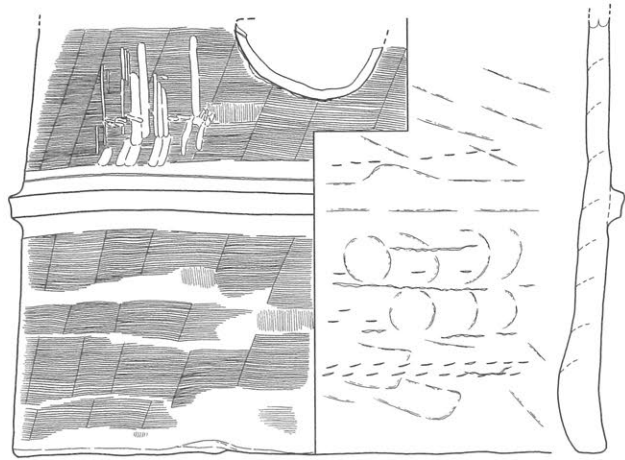
写真3 1の内面(第2~3段)



2 (A)



第2図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(1) 円筒埴輪(1/4)



3 (A)

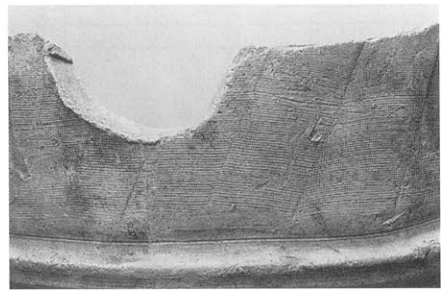


写真4 3の外面(第2段)

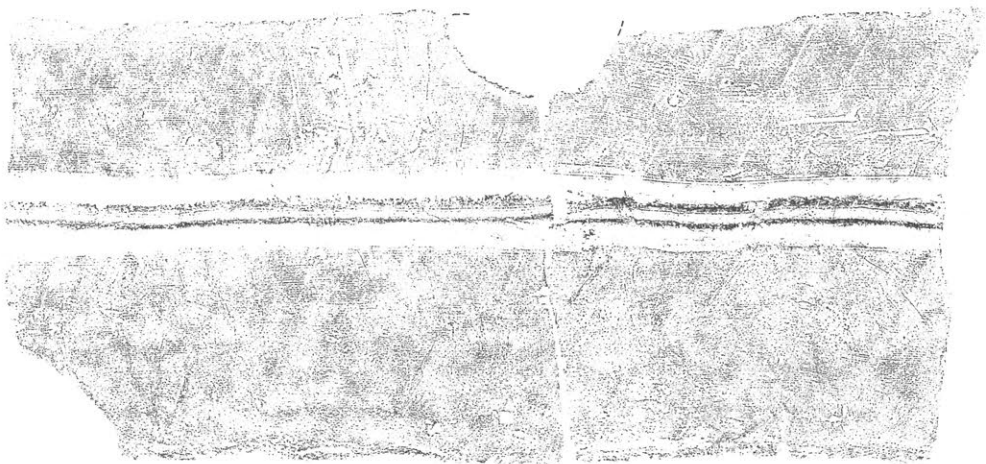


写真5 3の不明痕跡(第2段外面)

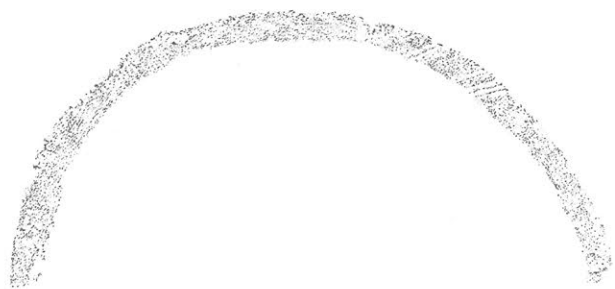


写真6 3の不明痕跡(内面)



4 (A)



第3図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(2) 円筒埴輪(1/4)

をほどこしていたことが確認でき、これにより突帯は切り取られている。また、鱭の貼り付けにはハケなどの工具も使われていたようである(写真7)。6は鱭の上端の破片である。色調や焼成から5と同一個体と思われる。突帯に取り付いた痕跡は現状では確認できない。

7は突帯を2条含む破片で、段の中間あたりから鱭が取り付けられている(写真10)。下の突帯直下での径は約35cmである。外面にはB種ヨコハケがほどこされている。内面には念入りに横ないしは左上方向のハケがほどこされているが、これはおおよそ下の突帯の高さより上でおこなわれているようである。鱭の下端は水平にならず、斜めに立ち上がることが特徴的である。8は色調、突帯形状などが類似し、ハケメも一致することから7と同一個体と思われる。図示したとおり、第1～2段の破片で、底径は約30cm、第1段高が約14cmである。第2段には円形あるいは半円形の透孔が穿たれている。外面にはB種ヨコハケがほどこされており、その静止痕はやや斜めに傾いている(写真11)。内面は一部に接合痕が残るものの、丁寧にナデがほどこされており、7の内面最下部と似た状況である。こうしたことから、7は8と同一個体で第2～4段の破片といえるかもしれない。

9は突帯を2条含む破片で、上の突帯直下での径は約34cm、突帯間隔は約12cmである。外面は摩滅が著しい箇所も多いが、タテハケの後にヨコハケがほどこされている。ヨコハケに静止箇所はあるものの、静止痕といえるような明瞭なものではない(写真12)。内面はハケの後にナデをほどこしている。10は鱭が剥離した痕跡の残る破片である。鱭の接合に際しては器面に鋭利な工具で縦方向に何回も沈線を刻んでいることが観察でき、それにより突帯は切り取られている(写真13)。なお、その突帯の下にも1条は突帯が存在していたようであり、鱭は第2段より上のいずれかの段から取り付けいていたことになる。また、器面の残存状態が悪いため断定はできないが、突帯形状や器壁の厚さなどから判断して9と同一個体である可能性がある。

11は突帯を含む破片で、径は突帯直下で約28.5cmである。上段には円形あるいは半円形の透孔がみられる。下段では上の突帯に沿ってB種ヨコハケをほどこした後に、ハケがおよばなかった下部も充填するためか、ハケを下方にずらしていっていることが観察できる(写真14)。内面はタテハケの後にナデをほどこしている(写真15)。

12は突帯を含む破片で、径は突帯直下で約28cmである。外面は摩滅が著しく、突帯形状や調整方法は不明である。ただし、突帯の剥離面の残りは良好で、タテハケと突帯設定の凹線が観察できる(写真16)。凹線はほぼ水平にほどこされているが、波打っている箇所が一部にある。外面はヨコナデである。

13は第1～2段の破片で、底径は約28cm、底部高は約13.5cmである。第1段の外面にはタテハケの後にヨコハケがほどこされている。ヨコハケに静止箇所はあるものの、静止痕といえるような明瞭なものではない。また、外面の底部付近では約2cmの幅で横方向のナデとも擦痕とも思えるような痕跡がみられる(写真18)。突帯設定やヨコハケに伴うものなのか、それとも独自にほどこされたものなのかは不明である。また、第1条突帯の上辺にL字状の痕跡がわずかにみられるが、突帯設定によるものか、それともヨコハケによるものなのかは不明である。なお、第1、2段ともに赤色顔料の塗布はなされていないが、第1段外面には上段で赤色顔料を塗布した際のしずくが落ちている(写真17)。底面には径1cmほどの草木類の痕跡がほぼ直交する方向で2箇所みられる。内面はナデ調整であるが接合痕が観察でき、底部から幅2.5cmほどの粘土紐を積み上げて成形していることがわかる。

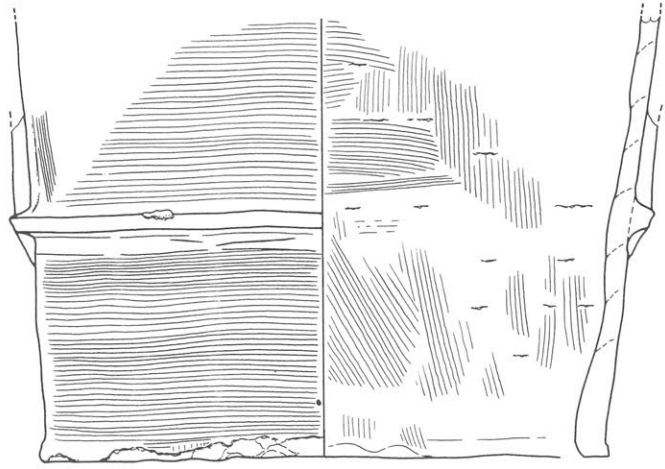
14は鱭の破片である。剥離面を垂直にすると鱭の端面のラインが斜めになることから、鱭のなかでも下方の破片だと推測される。このことは赤色顔料の飛沫が付着していることから裏付けられる(写真20)。

15は鱭をもつ朝顔形埴輪の円筒部の破片で、ちょうど肩部となる部分から上が欠損している。円筒部における最上段の突帯間隔が短くなるタイプの朝顔形埴輪で、そのせまい突帯間には逆三角形の小さな透孔が穿たれている。突帯剥離箇所では突帯設定の目印とも思えるような擦痕があるようにもみえるが判然としない(写真19)。なお、現状では、鱭の貼り付けに際して突帯を切り取ったりするようなことはしていないようにみえる。16は朝顔形埴輪の肩部の破片で、C地点で採集された資料はこの1点のみである。外面の突帯貼り付けに対応して内面にヨコナデがみられる。

(加藤一郎)



写真7 5の罎接合部



5 (B)

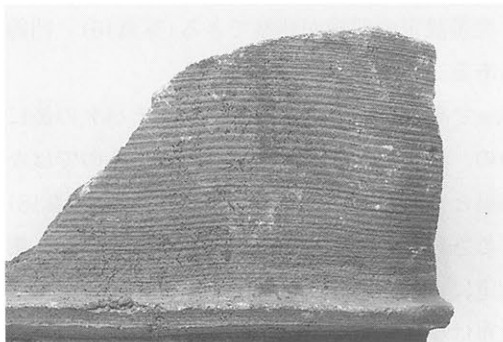
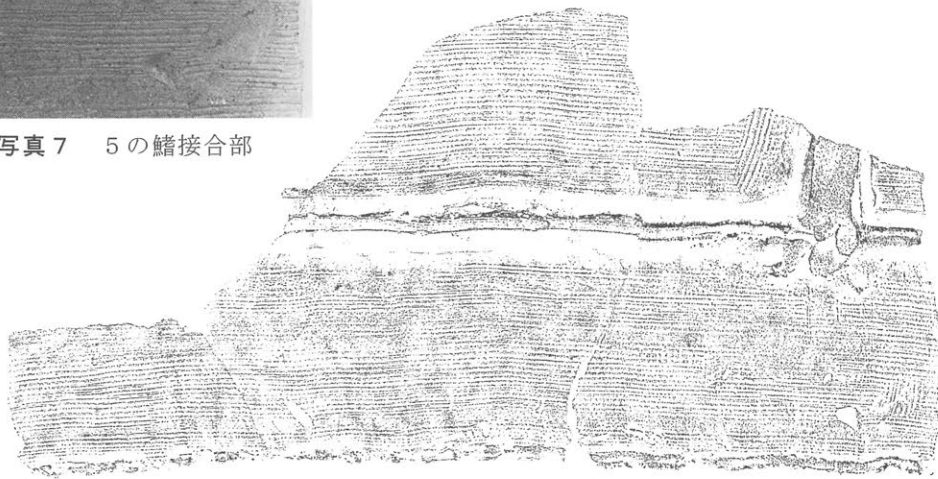
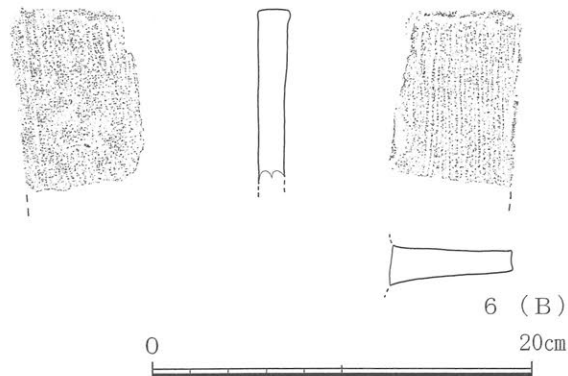


写真8 5の外表面 (第2段)



写真9 5の内面 (第1~2段)



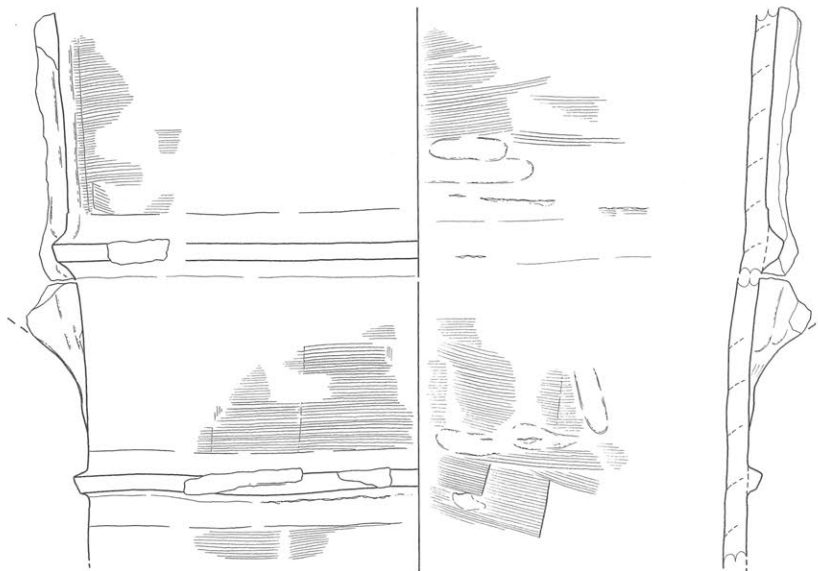
6 (B)

0 20cm

第4図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図 (3) 円筒埴輪 (1/4)



写真10 7の鰭接合部



7 (B)

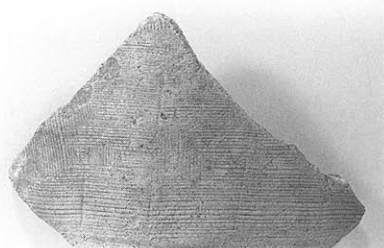
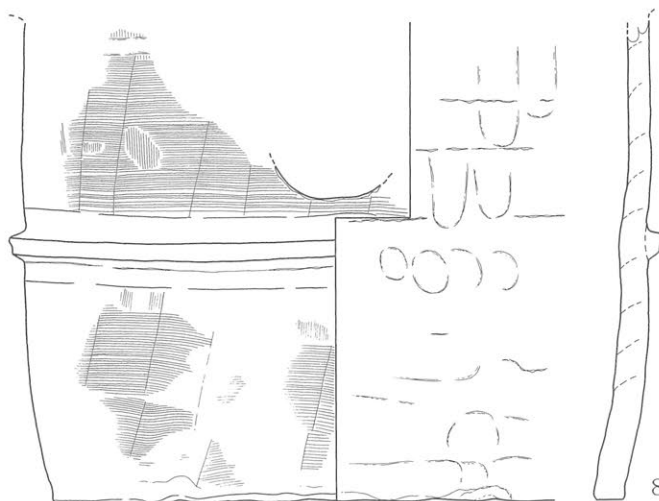


写真11 8の外表面 (第2段)



8 (B)



7のヨコハケ



8のヨコハケ

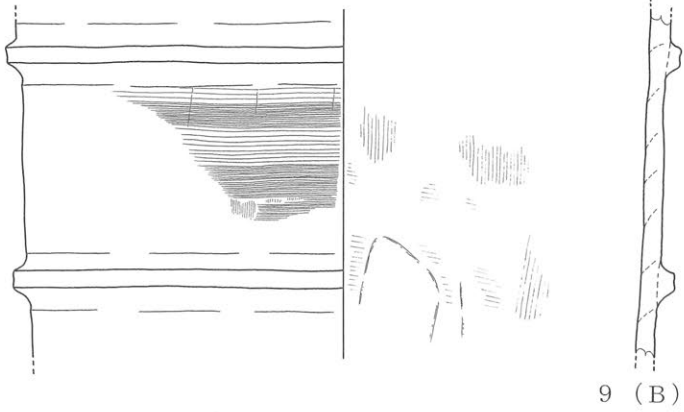
ハケメ拓本 (1/1)



第5図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(4) 円筒埴輪 (1/4)



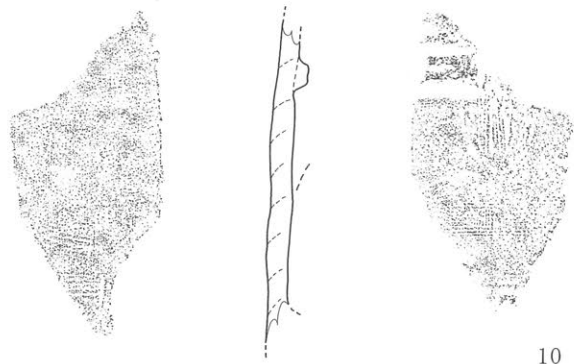
写真12 9の外表面



9 (B)



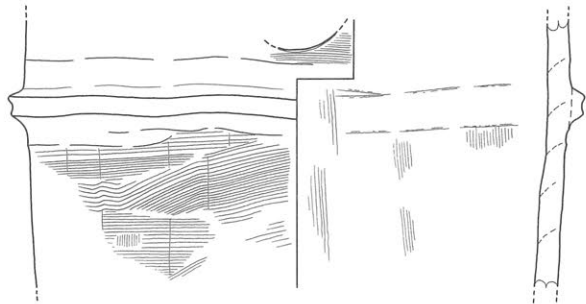
写真13 10の鱗接合部



10 (B)



写真14 11の外表面



11 (B)

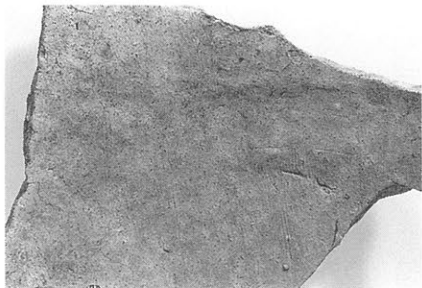


写真15 11の内表面

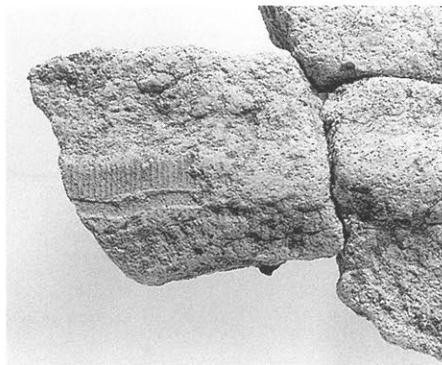
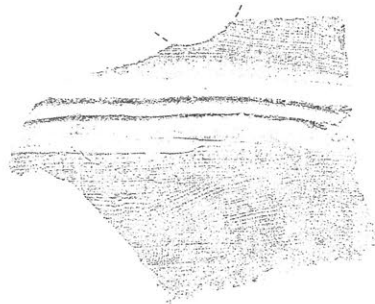
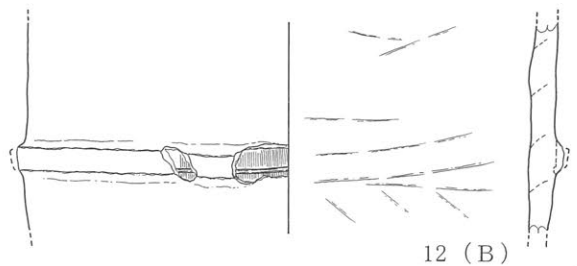


写真16 12の突帯剥離箇所

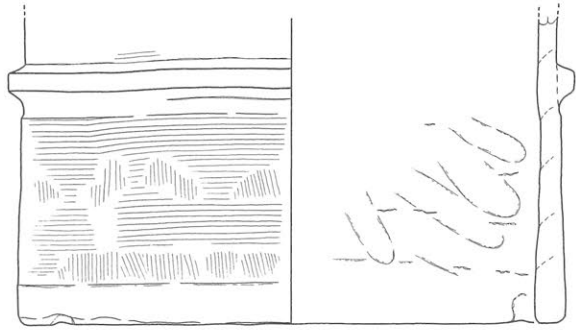


12 (B)



第6図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(5) 円筒埴輪(1/4)





13 (B)

写真17 13の赤色顔料付着状況

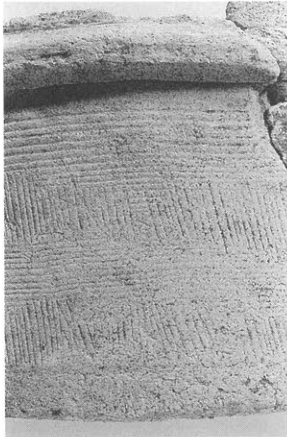
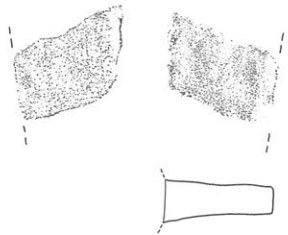
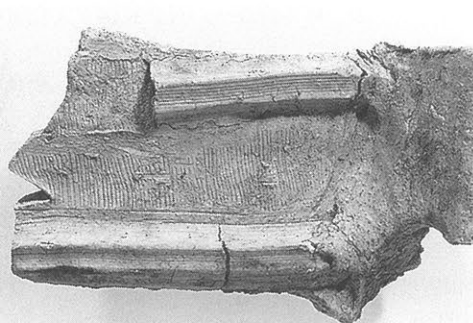
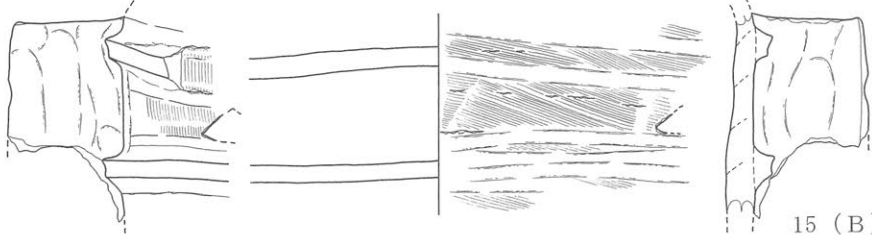


写真18 13の外面（第1段）



14 (B)

写真19 15の外面および突帯剥離箇所 写真20 14の赤色顔料付着状況



15 (B)



16 (C)



第7図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(6) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/4)

## まとめ

以上、本参考地出土の埴輪について報告してきた。最後に、過去に外堤でおこなわれた調査やその成果<sup>(2)</sup>と比較して、本参考地に伴う埴輪の様相の一端を示し、まとめとしたい。

墳丘における採集地点は複数箇所であったが、それぞれの埴輪の特徴に大きな差異は認められなかった。一方、墳丘採集品と外堤出土品に違いがあるかどうか、という視点でみた場合でも、両者に差は認められず、その意味で現在知られる本参考地の埴輪については均質な構成といえそうである。外堤では埴輪列が確認されたほか、一部の埴輪については復元がなされ、個体の全容を知ることができる。なかでも鱗付円筒埴輪についてはA・Bの2者に分けられ、検出された埴輪列の大半はAで占められることが指摘されている<sup>(3)</sup>。資料数や残存の度合いといった制約はあるものの、今回報告した資料もこの指摘を逸脱するものではないといえる。

少なくとも、現状で墳丘・外堤に樹立されていた埴輪は、これまでも指摘されたとおり<sup>(4)</sup>、古い特徴を残しながらも、新しい技術に関する情報も有している工人集団が深く関与した資料群であり、古墳の規模から類推される埴輪の樹立本数を考えれば、その埴輪はきわめて均質といえるであろう。今回の報告が、畿内の大型墳における墳丘本体・外堤・陪冢に樹立された埴輪のありかたを考えるうえでの基礎的な材料のひとつとなれば幸いである<sup>(5)</sup>。

(土生田純之・清喜裕二・加藤一郎)

### 註

- (1) 観察は、復元された個体以外に異なる特徴をもつものが含まれていないかを確認し、本参考地の埴輪の傾向を知る目的で、できる限り悉皆的に行った。  
なお、実見にあたっては、田辺征夫・西口寿生・高橋克壽・森川実の各氏に多大なご協力を賜った。記して謝意を表したい。
- (2) 蜷川式胤『観古圖説』陶器之部一、1876年。  
西口寿生・町田 章「古墳」『平城宮発掘調査報告VI—平城京左京一条三坊の調査—』（『奈良国立文化財研究所学報』第23冊）、奈良国立文化財研究所、1975年。  
伊藤勇輔「ウワナベ古墳外堤」『奈良県古墳発掘調査集報I』（『奈良県文化財調査報告書』第28集）、奈良県教育委員会、1976年。  
伊藤雅文「奈良市ウワナベ古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度(第1分冊)、奈良県立橿原考古学研究所、1989年。  
安井宣也「ウワナベ古墳外堤の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成3年度、奈良市教育委員会、1992年。  
鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内I—杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告—』（『奈良市埋蔵文化財調査研究報告』第1冊）、奈良市教育委員会、1997年。
- (3) 註(2)西口・町田文献、115～116頁。なお、奈良市教育委員会が調査した資料も含めて検討した鐘方正樹も同様の見解を示している(註2鐘方文献参照)。
- (4) 註(2)西口・町田文献、125～127頁。
- (5) なお、すでに高橋克壽が指摘するように、本参考地の埴輪ときわめて類似した埴輪が斑鳩地域においても確認されており、注目される。  
高橋克壽「埴輪の成立と展開」『畿内の巨大古墳とその時代』（『季刊考古学』別冊14）、雄山閣、2004年。